

國學院大學學術情報リポジトリ

『楚辭補注』 譯注稿(三十六)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學中國學會 公開日: 2025-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001401

『楚辭補注』 譯注稿 (三十六)

楚辭卷第四

九章章句第四

懷沙

〔本文〕

- (1) 滔滔孟夏兮、
滔滔たる孟夏、
- (2) 草木莽莽。、
草木莽莽たり。
- (3) 傷懷永哀兮、
傷み懷ひて永く哀しみ、
- (4) 汨徂南土。、
いづとして南土に徂く。
- (5) 眴兮杳杳、
まばたきと杳杳として、
- (6) 孔靜幽默。、
孔だ靜かにして幽默なり。
- (7) 鬱結紆軫兮、
鬱結紆軫して、
- (8) 離慙而長鞠。、
離に離ひて長く鞠まる。
- (9) 撫情効志兮、
情を撫し志を効し、
- (10) 冤屈而自抑。、
冤屈して自ら抑ふ。

〔通釋〕

陽の氣の盛んな初夏、草木の盛んに生い茂る時、私は思いを痛ませ悲しみ続けつつ、南方の土地へと行った。またたいてよく見ようとするが、行く手は深く暗く、あたりは非常に静寂で物音一つしない。心はふさぎむすぼれてまつわり痛み、憂いにあつていつまでも行きづまったままでいる。心を撫で安んじ、志を顧みて過失が無いと明らかにし、冤罪の屈辱にainaながらも、みずからおさえている。

〔洪興祖補注〕

(1) 〈滔滔孟夏兮〉

滔滔、盛陽貌也。『史記』作「陶陶」。

〔補曰〕『説文』、「滔、水漫漫大貌。」他刀切。又、滔、聚也。音陶。前云「方仲春而東遷」、此云「滔滔孟夏」者、屈原以仲春去國、以孟夏徂南土也。

〔訓讀文〕

滔滔は、盛陽の貌なり。『史記』は「陶陶」に作る。

〔補に曰はく〕『説文』に、「滔は、水の漫漫として大いなる貌」と。他刀の切。又、滔は、聚なり。音は陶。前に「仲春に方りて東遷す」と云ひ、此に「滔滔たる孟夏」と云ふは、屈原は仲春を以て國を去り、孟夏を以て南土に徂ゆくなり、と。

〔語釋〕

○滔滔——水が集まり盛大に流れるように、陽の氣が盛んになって万物が隆盛してゆくさま。○史記作「陶陶」——『史

記」(點校本二十四史修訂本) 卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に、「乃ち懷沙の賦を作る。其の辭に曰はく、陶陶たる孟夏、草木莽莽たり：(乃作懷沙之賦。其辭曰、陶陶孟夏兮、草木莽莽：)」とある。○說文——『說文解字注』(上海古籍出版社) 十一篇上二「水部」に「滔は、水の漫漫として大なる兒(滔、水漫漫大兒)」とある。水がたつぷりと流れて盛大な様。○前云——『楚辭補注』(楚辭要籍叢刊) 卷四「九章章句第四 哀郢」の冒頭に、「皇天の命を純らにせざる、何ぞ百姓の震愆する。民は離散して相失ひ、仲春に方りて東遷す(皇天之不純命兮、何百姓之震愆。民離散而相失兮、方仲春而東遷)」とある。

(2) 〈草木莽莽〉

言孟夏四月、純陽用事、煦成萬物。草木之類莫不莽莽盛茂。自傷不蒙君惠、而獨放棄、曾不若草木也。

〔補曰〕莽、莫補切。

〔訓讀文〕

言ふところは、孟夏四月、純陽 事を用ひ、萬物を煦成す。草木の類 莽莽として盛茂せざるは莫し。自ら君の恵を蒙らずして、獨り放棄せられ、曾ち草木に若かざるを傷むなり、と。

〔補に曰はく〕莽は、莫補の切、と。

〔語釋〕

○純陽用事——「用事」は思い通りにふるまう意。ここでは、最も盛んになった陽の気が力を揮うこと。○煦成萬物——万物をめぐみ育てること。○莫不莽莽盛茂——草木の類で繁茂しないものはないということ。○不若草木——君主からの恩恵を受けず、のびのびと生きることができていない自分は、陽の気の恵みを受け、繁茂する草木には及ばないということ。

(3) (傷懷永哀兮)

懷、思也。永、長也。

〔訓讀文〕

懷は、思ふなり。永は、長きなり。

〔語釋〕

なし。

(4) (汨徂南土)

汨、行貌。徂、往也。言己見草木盛長、而已獨汨然放流、往居江南之土・僻遠之處。故心傷而長悲思也。土、一作「去」。

〔補曰〕汨、越筆切、見騷經。

〔訓讀文〕

汨は、行く貌。徂は、往くなり。言ふころは、己草木の盛長を見て、己獨り汨然として放流せられ、往きて江南の土・僻遠の處に居る。故に心傷みて長く悲思するなり、と。土、一に「去」に作る。

〔補に曰はく〕汨は、越筆の切、騷經に見ゆ、と。

〔語釋〕

○汨然放流——はやい水流に流されるかのよう、左遷されること。○僻遠之處——楚の都・郢から遠く離れたところ。○汨、越筆切、見騷經——『楚辭補注』(楚辭要籍叢刊)卷一「離騷章句第一」に「汨として余將に及ばざらんとするがごと

し（汨余若將不及兮）」とある。その王逸注に「汨は、去る貌。疾はやきこと水の流るるが若きなり（汨、去貌。疾若水流也）」とある。

(5) 〈胸兮杳杳〉

胸、視貌也。杳杳、深冥貌也。『史記』作「窈窈」。

〔補曰〕胸、與「瞬」同。『說文』云、「開闔目數搖也。」

〔訓讀文〕

胸けんは、視る貌なり。杳杳は、深冥の貌なり。『史記』は「窈窈」に作る。

〔補に曰はく〕胸は、「瞬」と同じ。『說文』に云ふ、「開闔かいかふして目數々揺らぐなり」と。

〔語釋〕

○深冥貌——奥深く、くらい様。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「胸兮窈窈」とある。○說文——『說文解字注』（上海古籍出版社）四篇上「目部」に「旬は、目搖らぐなり（旬、目搖也）」とある。※「旬」は「胸」の異体字。

(6) 〈孔靜幽默〉

孔、甚也。『詩』曰、「亦孔之將。」默默、無聲也。言江南山高澤深、視之冥冥、野甚清淨、漠無人聲。一云「孔靜兮」。『史記』「默」作「墨」。

〔訓讀文〕

孔は、甚だしきなり。『詩』に曰はく、「亦た孔だ之れ將おほいなり」と。默默は、聲無きなり。言ふところは、江南は山高く澤深くして、之を視るに冥冥にして、野甚だ清淨なり。漠として人聲無し、と。一に云ふ「孔靜兮」と。『史記』は「黙」を「墨」に作る。

〔語釋〕

○詩曰——『毛詩正義』（十三經注疏）卷八 幽風「破斧」に同文あり。毛傳に「將は大なるなり（將、大也）」とある。
○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「孔靜幽墨」とある。

〔7〕（鬱結紆軫兮）

紆、屈也。軫、痛也。『史記』「紆」作「寃」。

〔訓讀文〕

紆は、屈なり。軫は、痛むなり。『史記』は「紆」を「寃」に作る。

〔語釋〕

○鬱結紆軫——心がふさぎ、むすぼれて痛む様。○紆、屈也——「屈」はねじ曲がること。志をねじ曲げられてふさぎこむさま。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「寃結紆軫兮」とある。

〔8〕（離慙而長鞠）

慙、痛也。鞠、窮也。言己愁思、心中鬱結、紆屈而痛、身遭疾病、長窮困苦、恐不能自全也。『史記』「慙」作「愍」、「而」

作「之」。

〔補曰〕離、遭也。愍與「愍」同。

〔訓讀文〕

愍^{びん}は、痛むなり。鞠^{きく}は、窮まるなり。言ふところは、己の愁思、心中鬱結し、紆屈して痛み、身疾病に遭ひて、長く困苦を窮め、自ら全くする能はざるを恐るるなり、と。『史記』は「愍」を「愍」に作り、「而」を「之」に作る。
〔補に曰はく〕離は、遭ふなり。愍は「愍」と同じ、と。

〔語釋〕

○恐不能自全——恐れているのは、何をどうしようと思を全うできないこと。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「離愍之長鞠」とある。

〔9〕（撫情効志令）

撫、循也。効、猶覈也。

〔訓讀文〕

撫^なは、循^なづるなり。効^なは、猶ほ覈のごときなり。

〔語釋〕

○効、猶覈也——覈はしらべる。おおわれた事実を調べ明らかにすること。

(10) 〈冤屈而自抑〉

抑、按也。言己身多病長窮、恐遂顛沛。撫己情意、而考覈心志、無有過失、則屈志自抑、而不懼也。『史記』云、「俛詘以自抑。」

〔訓讀文〕

抑は、按ふるなり。言ふところは、己れ身病ひ多くして長く窮し、遂に顛沛せんことを恐る。己れの情意を撫して、心志を考覈し、過失有ること無ければ、則ち志を屈して自ら抑へて、懼れざるなり、と。『史記』に云ふ、「俛詘して以て自ら抑ふ」と。

〔語釋〕

○顛沛——つまずきたおれる。ここでは、多く憂いを抱えているため、破滅へと向かうことに喩える。○撫己情意——自分の気持ちなどをなで安んじ、穏やかにさせる意。○考覈心志——今までの志が誠実であったか調べて明らかにすること。○無有過失、則屈志自抑、而不懼也——志を顧みて、やはり自己に過失が無かつたならば、志を表に出し過ぎないように自ら抑制して、恐れることは何も無いということ。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「俛詘以自抑」とある。

〔本文〕

- (11) 刑方以爲圜兮、
方を刑^{けず}つて以て圜と爲すも、
常度未だ替^{すた}れず。
(12) 常度未替。
(13) 易初^{しよ}俛^み迪^ぢ兮、
初^{しよ}を易^かへ迪^ぢに俛^みくは、
(14) 君子所鄙^{いん}。
君子の鄙^{いん}しむ所。

(15) 章畫志墨兮、
畫を章かにし墨を志ふ、

(16) 前圖未だ改めず。

(17) 内厚質正兮、
内厚く質正しきは、

(18) 大人所盛。
大人の盛とする所。

(19) 巧倅不斲兮、
巧倅かうさいも斲きらざれば、

(20) 孰察其撥正。
孰れか其の撥はつの正しきを察せん。

〔通釋〕

今の世は四角い木を削って円くしてしまいが、守るべき常法はまだすたつてはいない。初志を変え、道に背くのは、君子のいやしむところである。(大工が、)線をはつきりと引き、繩墨を常におもう、その以前からの方法は、まだ改まつてはいない。心が厚く性質が正しいのは、高德の人の盛んにほめるところであるが、名匠倅も実際に切つて見せなければ、だれがその寸法の正確さを知ろうか。

〔洪興祖補注〕

(11) 〈剞方以爲圓兮〉

剞、削。

〔補曰〕剞、吾官切、圓削也。

〔訓讀文〕

剞は、削るなり。

〔補に曰はく〕 刃は、吾官の切、圓く削るなり、と。

〔語釋〕

なし。

〔12〕〔常度未替〕

度、法也。替、廢也。言人刃削方木、欲以爲圓、其常法度尚未廢也。以言讒人譖逐放己、欲使改行、亦終守正而不易也。

〔訓讀文〕

度は、法なり。替は、廢るるなり。言ふところは、人方木を刃削して、以て圓を爲らんと欲す。其の常の法度尚ほ未だ廢れざるなり。以て讒人譖逐して己を放ち、行を改めしめんと欲するも、亦た終に正しきを守りて易へざるを言ふなり、と。

〔語釋〕

○其常法度尚未廢——もともと四角であつた木を丸く削るように、あるがままの形を都合のよいように変えてしまうのは常法に背くことであり、それが行なわれている今でもなお常法はまだ廢れていないということ。○譖逐——事實無根の告げ口で追い払うこと。

〔13〕〔易初忤迪兮〕

『史記』「迪」作「由」。一無「初」字。

〔訓讀文〕

『史記』は「迪」を「由」に作る。一に「初」の字無し。

〔語釋〕

○怀——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）懷沙部校勘記に「怀は、原「本」に作る、黃靈庚楚辭集校に據りて改む。案ずるに怀、古の「倍」字にして、「本」と字形似て相訛あやまる（怀、原作「本」、據黃靈庚楚辭集校改。案怀、古「倍」字、與「本」字形似相訛）」とある。『楚辭章句疏證』卷五九章「懷沙」に「初を易へ由なちに怀そむ（倍）くは、初に違ひ本に背くを言ふ（易初怀（倍）由、言違初背本）」とある。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「易初本由兮」とある。

〔14〕〈君子所鄙〉

鄙、耻也。言人遭世遇、變易初行、遠離常道、賢人君子之所耻、不忍爲也。

〔訓讀文〕

鄙は、耻はづるなり。言ふところは、人に遭ひ世に遇ひ、初行を變易し、常道に遠離するは、賢人君子の耻はづる所にして、爲すに忍びざるなり、と。

〔語釋〕

○人遭世遇、變易初行——人や世間からの影響を受けて初志を変えてしまうこと。

〔15〕〈章畫志墨兮〉

章、明也。志、念也。『史記』「志」作「職」。

〔補曰〕 畫音獲。

〔訓讀文〕

章は、明らかにするなり。志は、念おもふなり。『史記』は「志」を「職」に作る。

〔補に曰はく〕 畫音は獲、と。

〔語釋〕

○志、念也——念は常におもうこと。ここでは正確な線を引くことができる繩墨を常におもい、規範に立ち返ることを忘れない意。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「章畫職墨兮」とある。

〔16〕〔前圖未改〕

圖、法也。改、易也。言工明於所畫、念其繩墨、修前人之法、不易其道、則曲木直而惡木好也。以言人遵先聖之法度、修其仁義、不易其行、則德譽興而榮名立也。『史記』「圖」作「度」。

〔訓讀文〕

圖は、法なり。改は、易ふるなり。言ふところは、工畫く所を明らかにし、其の繩墨を念じ、前人の法を修め、其の道を易へざれば、則ち曲木直にして惡木好なり。以て人先聖の法度に遵ひ、其の仁義を修め、其の行を易へざれば、則ち德譽興りて榮名立つを言ふなり、と。『史記』は「圖」を「度」に作る。

〔語釋〕

○德譽興而榮名立——德あるほまれが興り、盛んな名声が立つこと。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十

四「屈原賈生列傳第二十四」に「前度未改」とある。

(17) 〈内厚質正兮〉

『史記』作「内直質重兮」。

〔訓讀文〕

『史記』は「内直質重兮」に作る。

〔語釋〕

○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「内直質重兮」とある。

(18) 〈大人所盛〉

言人質性敦厚、心志正直、行無過失、則大人君子所盛美也。

〔訓讀文〕

言ふところは、人質性敦厚、心志正直にして、行ひ過失無ければ、則ち大人君子の盛美とする所なり、と。

〔語釋〕

○質性敦厚——人情に厚い資質をもっていること。○心志正直——心や志が正しくまっすぐなこと。

(19) 〈巧倕不斷兮〉

倕、堯巧工也。斲、斲也。『史記』作「巧匠」。斲、一作「劉」、一作「斷」。

〔補曰〕倕音垂。『書』曰、「垂、汝共工」。『莊子』曰、「工倕旋而蓋規矩」。『淮南』曰、「周鼎著倕、使銜其指」。『說文』云、「斲、斲也」。『劉殺也』。作「斲」者是。

〔訓讀文〕

倕は、堯の巧工なり。斲は、斲るなり。『史記』は「巧匠」に作る。斲は、一に「劉」に作る、一に「斷」に作る。

〔補に曰はく〕倕音は垂。『書』に曰はく、「垂よ、汝工を共せよ」と。『莊子』に曰はく、「工倕旋して規矩に蓋ぐ」と。『淮南』に曰はく、「周鼎に倕を著はして、其の指を銜ましむ」と。『說文』に云ふ、「斲は、斲なり」。『劉は殺なり」と。『斲』に作る者は是なり、と。

〔語釋〕

○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「巧匠不斷兮」とある。○書曰——『尚書正義』（十三經注疏）卷第三「虞書」舜典に「帝曰はく、「疇か予の工に若はん」と。兪曰はく、「垂なるかな」と。帝曰はく、「俞り。咨、垂、汝工を共せよ」と。（帝曰、「疇若予工」兪曰、「垂哉」帝曰、「俞咨垂汝共工」）とある。その偽孔伝に「問ふ、「誰か能く我が百工の事に順ふ者なるか」と。朝臣垂を擧ぐ。垂は、臣の名なり。工は其の職事を供するを謂ふ（問、「誰能順我百工事者」朝臣舉垂。垂、臣名。工謂供其職事）」とある。○莊子曰——『莊子集解』（新編諸子集成）卷五「達生第十九」に「工倕旋して規矩に蓋ぐ（工倕旋而蓋規矩）」とある。○淮南曰——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷八「本經訓」に「昔者蒼頡書を作りて天粟を雨らし、鬼夜哭す。伯益井を作りて、龍玄雲に登り、神昆侖に棲む。能愈多くて徳愈薄ければなり。故に周鼎には倕を著して、其の指を銜ましめ、以て大巧の爲すべからざるを明らかにするなり（昔者蒼頡作書而天雨粟、鬼夜哭、伯益作井、而龍登玄雲、神棲昆侖。能愈多而徳愈薄矣。故周鼎著倕、使銜

其指、以明大巧之不可爲也」とある。○説文——『説文解字注』（上海古籍出版社）十四篇上「斤部」に「斲は、斲なり（斲、斲也）」・十四篇上「金部」に「鑼は、殺なり（鑼、殺也）」とある。※鑼は劉の異体字。

〔20〕〈孰察其撥正〉

察、知也。撥、治也。言僇不以斤斧斲斲、則曲木不治、誰知其工巧者乎。以言君子不居爵位、衆亦莫知其賢能也。『史記』作「揆正」。

〔補曰〕『説文』曰、「撥、治也。比末切。」「揆、度也。」

〔訓讀文〕

察は、知なり。撥は、治むるなり。言ふところは、僇斤斧を以て斲斲せざれば、則ち曲木治まらず、誰か其の工巧を知る者あらんや。以て君子爵位に居らず、衆も亦た其の賢能を知る莫きを言ふなり、と。『史記』は「揆正」に作る。

〔補に曰はく〕『説文』に曰はく、「撥は、治なり。比末の切。」「揆は、度なり」と。

〔語釋〕

○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「孰察其揆正」とある。○説文——『説文解字注』（上海古籍出版社）十二篇上「手部」に「撥は、治なり（撥、治也）」「揆は、度なり（揆、度也）」とある。

〔本文〕

〔21〕玄文處幽兮、

玄文も幽に處れば、

〔22〕矇眴謂之不章。

矇眴は之を章かならずと謂ふ。

〔23〕離婁微睇兮、

離婁も微睇すれば、

(24) 瞽以爲無明。 瞽は以て明らかなる無しと爲す。

(25) 變白以爲黑兮、 白を變じて以て黒と爲し、

(26) 倒上以爲下。 上を倒にして以て下と爲す。

(27) 鳳皇在笈兮、 鳳皇は笈に在り、

(28) 雞鶩翔舞。 雞鶩は翔舞す。

(29) 同糶玉石兮、 玉石を同糶して、

(30) 一槩而相量。 一槩にして相量る。

(31) 夫惟黨人鄙固兮、 夫れ惟だ黨人の鄙固なる、

(32) 羌不知余之所臧。 羌余の臧き所を知らず。

〔通釋〕

はつきりした黒い模様も、これを暗がりにおけば、盲人たちはこれを明白でないという。すぐれた視力をもつ離婁もすこし流し目をすれば、盲人たちは彼は目が見えないのだと思う。白を變じて黒とし、上をさかしまにして下とする。鳳凰はかごに捕えられ、鶏やあひるは大空を自由に舞い飛んでいる。玉と石とを合わせ混ぜて、一つ斗かきで量るようなことをしている。そもそも党人どもはいやしくかたくなで、ああ、まったく私のよいところがわからない。

〔洪興祖補注〕

(21) 〈玄文處幽兮〉

玄、墨也。幽、冥也。『史記』作「幽處」。

〔訓讀文〕

玄は、墨くろきなり。幽は、冥くらきなり。『史記』は「幽處」に作る。

〔語釋〕

○史記作——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「玄文幽處兮」とある。

〔22〕〈矇瞶謂之不章〉

矇、盲者也。『詩』云、「矇瞶奏公」。章、明也。言持玄墨之文、居於幽冥之處、則矇瞶之徒以爲不明也。言持賢知之士、居於山谷、則衆愚以爲不賢也。瞶一作「瞶」。史記無「瞶」字。

〔補曰〕有眸子而無見曰矇、無眸子曰瞶。

〔訓讀文〕

矇は、盲者なり。『詩』に云ふ、「矇もろう瞶ごう公を奏す」と。章は、明らかなり。言ふところは、玄墨の文もんを持し、幽冥の處ところに居れば、則ち矇瞶の徒とも以て明らかなりと爲すなり、と。言ふところは、賢知けんちを持するの士、山谷に居れば、則ち衆愚は以て賢ならずと爲すなり、と。瞶は一に「瞶」に作る。史記は「瞶」の字無し。

〔補に曰はく〕眸子ぼうし有れども見ゆること無きを矇と曰ひ、眸子無きを瞶と曰ふ、と。

〔語釋〕

○詩云——『毛詩正義』（十三經注疏）卷十六 大雅 文王之什「靈臺」第五章に「矇瞶公を奏す（矇瞶奏公）」とある。○玄墨之文——黒い模様の意。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「矇謂之不章」とある。○有眸子而無見曰矇、無眸子曰瞶——瞳が有るが見ることができない者を矇と呼び、瞳が無い者を瞶と呼ぶ。

〔23〕〔離婁微睇兮〕

離婁、古明目者也。『孟子』曰、「離婁之明。」睇、眇之也。

〔補曰〕『淮南』曰、「離朱之明。」即離婁也。黃帝時人、明目能見百步之外、秋毫之末。睇音弟。『說文』曰、「目小視也。南楚謂眇曰睇。」

〔訓讀文〕

離婁は、古の明目者なり。『孟子』に曰はく、「離婁の明」と。睇は、之を眇するなり。

〔補に曰はく〕『淮南』に曰はく、「離朱の明」と。即ち離婁なり。黃帝の時の人、明目能く百歩の外、秋毫の末を見る。睇、音は弟。『說文』に曰はく、「目小視なり。南楚、眇を謂ひて睇と曰ふ」と。

〔語釋〕

○孟子曰——『孟子注疏』（十三經注疏 卷十四「離婁章句上」）に「離婁の明、公輸子の巧も、規矩を以てせざれば、方員を成すこと能はず（離婁之明、公輸子之巧、不以規矩、不能成方員）」とある。公輸子は細工に巧みな者。「不以規矩、不能成方員」とは、さしがねやぶんまわしを用いなければ方形や円形のものを作ることができないこと。○睇、眇之也——眇とは、流し目に見ること。○淮南曰——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷一「原道訓」に「離朱の明は、箴末を百歩の外に察するも、淵中の魚を見る能はず（離朱之明、察箴末于百步之外、不能見淵中之魚）」とある。「箴末」は針先のこと。また、卷十九「修務訓」に「今夫れ盲者は、目は晝夜を別け、白黒を分くる能はざるも、然而れども琴を搏ち弦を撫すに、參彈復微し、攫援標拂し、手は蔑蒙なるが若く、一弦を失はず。使し未だ嘗て瑟を鼓せざる者なれば、離朱の明、攫援の捷、有りと雖も、猶ほ其の指を屈伸すること能はず（今夫盲者、目不能別晝夜、分白黒、然而搏琴撫弦、參彈復微、攫援標拂、手若蔑蒙、不失一弦。使未嘗鼓瑟者、雖有離朱之明、攫援之捷、猶不能屈伸其指）」とある。

○明目能見百步之外、秋毫之末——百歩先の鳥獸の秋毛の先のように細かなものを見ることができると意。○説文曰——『説文解字注』（上海古籍出版社）に同文は見えず、第四篇上「目部」には、「小袞視なり。目に従ふ弟の聲。南楚眇を睇と謂ふ（小袞視也。従目弟聲。南楚謂眇睇）」とある。「小袞視」は斜めに見ること。

(24) 〈瞽以爲無明〉

瞽、盲者也。『詩』云、「有瞽有瞽。」言離婁明目、無所不見、微有所眇、盲人輕之、以爲無明也。言賢者遭困厄、俗人侮之、以爲癡也。

〔補曰〕『説文』、「瞽、目但有眇也。」

〔訓讀文〕

瞽は、盲者なり。『詩』に云ふ、「瞽有り瞽有り」と。言ふところは、離婁は明目、見えざる所無し、微眇する所有り、盲人之を輕んじ、以て明無しと爲すなり、と。言ふところは、賢者困厄に遭ひ、俗人之を侮り、以て癡と爲すなり、と。

〔補曰はく〕『説文』に、「瞽は、目但だ眇有るのみなり」と。

〔語釋〕

○詩云——『毛詩正義』（十三經注疏）卷十九周頌「有瞽」に「瞽有り瞽有り（有瞽有瞽）」とある。○説文——『説文解字注』（上海古籍出版社）四篇上「目部」に「瞽は、目但だ眇有るのみなり（瞽、目但有眇也）」とある。

(25) 〈變白以爲黑兮〉

世以濁爲清也。『史記』「以」作「而」。

〔訓讀文〕

世濁を以て清と爲すなり。『史記』は「以」を「而」に作る。

〔語釋〕

○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「變白而爲黑兮」とある。

〔26〕〔倒上以爲下〕

俗人以愚爲賢也。

〔補曰〕下、音戸。

〔訓讀文〕

俗人愚を以て賢と爲すなり。

〔補に曰はく〕下、音は戸、と。

〔語釋〕

なし。

〔27〕〔鳳皇在箴兮〕

箴、籠落也。徐廣曰、「箴、一作郊。」

〔補曰〕箴音暮、『釋文』「音奴、又女家切。」「說文」曰、「籠也、南楚謂之箴。」

〔訓讀文〕

箴は、籠落なり。徐廣曰はく、「箴は、一に郊に作る」と。

〔補に曰はく〕箴音は暮、『釋文』に「音は奴、又女家の切」と。『說文』に曰はく、「籠なり、南楚之を箴と謂ふ」と。

〔語釋〕

○箴、籠落也——箴とは、鳥籠におさめられたことを言う。○徐廣曰——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」の『集解』所引の徐廣『史記音義』に同文あり。○釋文——『楚辭釋文』のこと。佚書。『楚辭補注』刊注稿（二）「本文第五小段」（『國學院中國學會報』第三十五輯所収）参照。○說文——『說文解字注』（上海古籍出版社）五篇上「竹部」に「洪興祖補注引說文に、箴は、籠なり。南楚之を箴と謂ふ。豈に洪氏見る所の本異なるか（洪興祖補注引說文、箴、籠也。南楚謂之箴。豈洪氏所見本異與）」とある。

〔28〕（雞鷺翔舞）

言聖人困厄、小人得志也。『史記』「鷺」作「雉」。

〔補曰〕鷺、鳧屬、音木。

〔訓讀文〕

聖人困厄し、小人志を得るを言ふなり。『史記』は「鷺」を「雉」に作る。

〔補に曰はく〕鷺は、鳧の屬、音は木、と。

〔語釋〕

○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「雞鷺翔舞」とある。

(29) (同糶玉石令)

賢愚雜廁。

〔補曰〕糶、雜也、女救切。

〔訓讀文〕

賢愚雜廁す。

〔補に曰はく〕糶は、雜なり、女救の切、と。

〔語釋〕

○賢愚雜廁——賢人と愚者が入り交じっているさま。

(30) (一概而相量)

忠佞不異。

〔補曰〕槩、平斗斛木、古代切。

〔訓讀文〕

忠佞異ならず。

〔補に曰はく〕槩は、斗斛を平らかにする木なり、古代の切、と。

〔語釋〕

○忠佞不異——忠臣も佞臣も区別されない。○槩、平斗斛木——槩は斗や斛のはかりの表面を平らに均す木である。

(31) 〈夫惟黨人鄙固兮〉

楚俗狹陋。鄙、一作「交」。『史記』云、「夫黨人之鄙妬兮。」

〔訓讀文〕

楚俗狹陋なり。鄙、一に「交」に作る。『史記』に云ふ、「夫黨人之鄙妬兮」と。

〔語釋〕

○楚俗狹陋——楚の俗人は偏狹で頑なであること。○史記云——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「夫黨人之鄙妬兮」とある。

(32) 〈羌不知余之所臧〉

莫照我之善意也。『史記』云、「羌不知吾所臧。」

〔訓讀文〕

我の善意を照らすこと莫きなり。『史記』に云ふ、「羌不知吾所臧」と。

〔語釋〕

○莫照我之善意也——君主に対する忠誠心を含む、自分の美点が明らかにされることが無い意。○史記云——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「羌不知吾所臧」とある。

〔本文〕

- (33) 任重載盛兮、
任 重く載 盛にして、
陷滯して濟さず。
かんたい
- (34) 陷滯而不濟。
瑾を懷き瑜を握り、
えい ゆ
- (35) 懷瑾握瑜兮、
窮して示ぐる所を知らず。
つぐ
- (36) 窮不知所示。
邑犬之羣吠兮、
いけん むち
- (37) 邑犬之羣吠兮、
吠所怪也。
怪しむ所を吠ゆるなり。
は
- (38) 吠所怪也。
俊を非り傑を疑ふは、
そし
- (39) 非俊疑傑兮、
固庸態也。
固より庸態なり。
ようたい
- (40) 固庸態也。
文質疏内兮、
衆余の異采を知らず。
ぶんしつ
- (41) 文質疏内兮、
衆不知余之異采。
材朴委積するも、
ざい
- (42) 衆不知余之異采。
余の有する所を知る莫し。
仁を重ね義を襲ね、
かぎ
- (43) 材朴委積兮、
余の有する所を知る莫し。
仁を重ね義を襲ね、
かぎ
- (44) 莫知余之所有。
謹厚にして以て豊を爲す。
かき ほう
- (45) 重仁襲義兮、
謹厚以爲豊。
重華選ふべからず。
あ
- (46) 謹厚以爲豊。
重華不可選兮。
孰れか余の従容を知らん。
あ
- (47) 重華不可選兮。
孰知余之従容。
古 固より並ばざる有り、
こ
- (48) 孰知余之従容。
孰れか余の従容を知らん。
豈に其の何の故なるかを知らんや。
あ
- (49) 古固有不並兮、
豈知其何故。
湯禹は久遠にして、
- (50) 豈知其何故。
湯禹は久遠にして、
- (51) 湯禹久遠兮、

(52) 邈而不可慕。

ほく 邈として慕ふべからず。

〔通釋〕

荷物が重く積み荷をたくさん積めるのだが、その車はぬかるみに落ち込んで動けないように、本来の志をはたすことができない。(在朝の小人たちはこんな有様であるが、一方) 瑾を懷に瑜を握りしめているような私でありながら、それを誰に告げ知らせてよいのかわからず、困りはてている。村の犬が群れ吠えるのは、怪しむものに吠えるのである。それと同じで、わけもわからずに俊才をそしり傑人を疑うのは、もとより凡人の態度である。外見はすぐれており、その美しさは内面まで疎通しているが、人々はこうした私の優れた特色を知ってはくれない。材木や素木は(いつでも用いられるように)たくさん積み重ねられているが、このような私のたくわえが多いのを人人は知ってはくれない。仁義の行いを積み重ねひたすら修養につとめ、慎み深く手厚くして自己を豊富にしている。しかし、聖君舜に会うことができな以上、だれが私の挙動を理解してくれようか。古代においても聖王と賢臣は時を同じくして出なかつた。どうしてそうなのか、そのわけがわかるうか。その上、殷の湯王、夏の禹王といった聖王の時代は久しく遠いのだから、あまりにもはるかで慕うことができない。

〔洪興祖補注〕

(33) 〈任重載盛兮〉

〔補曰〕盛、多也。言所任者重、所載者多也。重、直用切。

〔訓讀文〕

〔補に曰はく〕盛は、多なり。言ふところは、任ずる所の者重くして、載する所の者多きなり、と。重は、直用の切、と。

〔語釋〕

なし。

(34) 〔陷滯而不濟〕

陷、没也。濟、成也。言己才力盛壯、可任重載。而身放棄、陷沒沉滯、不得成其本志。

〔訓讀文〕

陷は、没するなり。濟は、成すなり。言ふところは、己の才力盛壯にして、重載に任すべし。而れども身は放棄せられ、かんぼろちんたい 陷沒沉滯し、其の本志を成すを得ず、と。

〔語釋〕

○ 陷沒沉滯——ここでは屈原が立派な才を有していながら、放逐されて滞って動けないことをいう。なお、『史記』(點校本二十四史修訂本)の『集解』所引の王逸注は「沈」を「沈」に作っており、『楚辭章句疏證』(上海古籍出版社)は「裴氏の集解の引く所は、其の舊を存するなり(裴氏集解所引、存其舊也)」としている。

(35) 〔懷瑾握瑜兮〕

在衣爲懷、在手爲握。瑾・瑜、美玉也。

〔補曰〕傳云、「鍾山之玉、瑾・瑜爲良。」瑾音僅。瑜音逾。

〔訓讀文〕

衣に在るを懷と爲し、手に在るを握と爲す。瑾・瑜は、美玉なり。

〔補に曰はく〕傳に云ふ、「鍾山の玉、瑾・瑜を良しと爲す」と。瑾音は僅。瑜音は逾、と。

〔語釋〕

○瑾・瑜——『說文解字注』（上海古籍出版社）卷二「瑾」・「瑜」の項に同文あり。なお、ここでは屈原自身の才徳の高さを喩えている。○傳云——未詳。なお『楚辭章句疏證』（上海古籍出版社）も「洪氏の傳を引くは、未だ出づる所を審らかにせず（洪氏引傳、未審所出）」とある。

〔36〕（窮不知所示）

示、語也。言己懷持美玉之徳、遭世闇惑、不別善惡、抱寶窮困、而無所語也。『史記』云、「窮不得余所示。」

〔訓讀文〕

示は、語ぐるなり。言ふところは、己美玉の徳を懷持し、世の闇惑して、善惡を別かたざるに遭ひ、寶を抱きて窮困して、語ぐる所無きなり、と。『史記』に云ふ、「窮して余の示ぐる所を得ず」と。

〔語釋〕

○示、語也——『漢書』（點校本二十四史）卷六十九「趙充國傳」に「宜しく使者を遣はして邊兵を行^りて豫め備へと爲さしめ、敕もて諸羌に示げ、仇を解くこと母からしめ……（宜遣使者行邊兵豫爲備、敕視諸羌、毋令解仇）……」の顔師古注に「師古曰はく、「……視て讀むを示と曰ふ。示は、之に語ぐるなり……」（師古曰、「……視讀曰示。示、語之也……）」とある。○史記云——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に同文あり。

(37) (38) (邑犬之羣吠兮、吠所怪也)

言邑里之犬羣而吠者、怪非常之人而噪之也。以言俗人羣聚毀賢智者、亦以其行度異、故羣而謗之也。一云「邑犬羣兮、吠所怪也。」『史記』無「之」字。一本此句與下文無「也」字。

〔訓讀文〕

言ふところは、邑里の犬羣がりて吠ゆとは、非常の人を怪しみて之に噪ぐなり。以て俗人羣聚して賢智なる者を毀り、亦た其の行度の異を以て、故に羣がりて之を謗るを言ふなり、と。一に云ふ「邑犬羣兮、吠所怪也」と。『史記』に「之」の字無し。一本此の句と下文と「也」の字無し。

〔語釋〕

○邑犬之群吠——『論衡校釋』（新編諸子集成）卷一「累害篇」に「屈平潔白にして、邑犬群がり吠ゆるは、怪しむ所に吠ゆるなり。俊を非り傑を疑ふは、固より庸能なり。偉士は坐するにも俊傑の才を以てすれば、群吠の聲を招致す…（屈平潔白、邑犬群吠、吠所怪也。非俊疑傑、固庸能也。偉士坐以俊傑之才、招致群吠之聲…）」とある。傑出した人物は才の高さから、凡庸な人々の誹謗中傷を招くということ。○行度——ここでは行うべき法則のこと。

(39) (非俊疑傑兮)

千人才爲俊、一國高爲傑也。『史記』云、「誹駿疑桀。」

〔補曰〕『淮南』云、「知過萬人謂之英、千人謂之俊、百人謂之豪、十人謂之傑。」

〔訓讀文〕

千人の才を俊と爲し、一國の高きを傑と爲すなり。『史記』に云ふ、「誹駿疑桀」と。

〔補に曰はく〕『淮南』に云ふ、「知萬人に過ぐるは之を英と謂ひ、千人なれば之を俊と謂ひ、百人なれば之を豪と謂ひ、十人なれば之を傑と謂ふ」と。

〔語釋〕

○史記云——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に同文あり。○淮南云——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷二十「秦族訓」に同文あり。ただし「俊」と「傑」の意味が王逸注と異なる。また、『史記』においては、『索隱』に「按ずるに、『尹文子』に云はく、「千人を俊と曰ひ、萬人を傑と曰ふ」と。今乃ち俊を誹りて傑を疑ふは、固より是れ庸人の態なり（按、『尹文子』云、「千人曰俊、萬人曰傑。」今乃誹俊疑傑、固是庸人之態也）」とある。

〔40〕〔固庸態也〕

庸、庸賤之人也。言衆人所謗非傑異之士、庸庸夫惡態之人也。何者、徳高者、不合於衆、行異者、不合於俗、故爲犬之所吠、衆人之所誚也。

〔訓讀文〕

庸は、庸賤しの人なり。衆人傑異の士を謗非する所、斯れ庸夫惡態の人を言ふなり。何となれば、徳高き者、衆に合せず、行ひ異なる者、俗に合せず、故に犬の吠ゆる所と爲り、衆人の誚る所なり。

〔語釋〕

○庸賤之人——卑陋な人の呼称。○謗非傑異之士——傑出した人を誹謗すること。

(41) 〈文質疏内兮〉

『史記』「疏」作「踈」。

〔補曰〕内、舊音訥。疏、疏通也。訥、木訥也。『釋文』、「内如字。」

〔訓讀文〕

『史記』は「疏」を「踈」に作る。

〔補に曰はく〕内は、舊音は訥。疏は、疏通なり。訥は、木訥なり。『釋文』に、「内は字の如し」と。

〔語釋〕

○疏、疏通也。訥、木訥也——「木訥」は寡黙で飾り気のないさま。『補注』の訓詁に従えば、内面の美しさをゆきわたらせる意。○釋文——『楚辭釋文』のこと。前掲。

(42) 〈衆不知余之異採〉

采、文采也。言己能文能質、内以疏達。衆人不知我有異藝之文采也。『史記』「余」作「吾」。徐廣曰、「異」、一作「奧」。

〔訓讀文〕

采は、文采なり。言ふところは、己文を能くし質を能くし、内以て疏達す。衆人我に異藝の文采有るを知らざるなり、と。『史記』は「余」を「吾」に作る。徐廣曰はく、「異」は、一に「奧」に作る、と。

〔語釋〕

○能文能質——『論語注疏』(十三經注疏)卷六「雍也篇」に「質文に勝てば則ち野なり、文質に勝てば則ち史なり。文

質彬彬として、然る後に君子なり（質勝文則野、文勝質則史。文質彬彬、然後君子）とあり、『論語集解』には「包曰はく、彬彬は、文質相半ばするの貌なり（包曰、彬彬、文質相半之貌）」とある。ここでは、屈原自身が衆他と異なり、文質を兼ね備えた理想的な人物であることを意味する。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に同文あり。なお、徐廣の説は、当該箇所『集解』所引の徐廣『史記音義』に同文あり。

〔43〕〔材樸委積兮〕

條直爲材、壯大爲朴。壯、一作「虜」。『史記』「朴」作「樸」。積、一作「質」。

〔補曰〕『説文』云、「朴、木皮也。樸、木素也。」

〔訓讀文〕

條直を材と爲し、壯大を朴と爲す。壯は、一に「虜」に作る。『史記』は「朴」を「樸」に作る。積は、一に「質」に作る。〔補に曰はく〕『説文』に云ふ、「朴は、木皮なり。樸は、木素なり」と。

〔語釋〕

○説文云——『説文解字注』（上海古籍出版社）六篇上「木部」に同文あり。

〔44〕〔莫知余之所有〕

言材木委積、非魯班則不能別其好醜。國民衆多、非明君則不知我之能也。

〔訓讀文〕

言ふところは、材木委積するも、魯班に非ざれば則ち其の好醜を別かつこと能はず。國民衆多なるも、明君に非ざれば則

ち我の能を知らざるなり、と。

〔語釋〕

○材木委積——材木を積み上げること。○非魯班——「魯班」は春秋時代、魯の名工。公輸班とも。木工の祖ともされる。『墨子』公輸篇にある、楚に仕えていた公輸班は、雲梯を開発して宋を攻めようとしたが、墨子は「非攻」の立場から宋の城の守りを固めて退けた故事が有名。ここでは、魯班のような名工でなければ集積した木材の好悪を判断できないとし、同じく明君でなければ自己の才を理解してくれないという意味である。

(45) 〈重仁襲義兮〉

重、累也。襲、及也。

〔補曰〕『淮南』云、「聖人重仁襲恩。」注云、「襲、亦重累。」

〔訓讀文〕

重は、累ぬるなり。襲は、及ぶなり。

〔補に曰はく〕『淮南』に云ふ、「聖人は仁を重ね恩を襲ぬ」と。注に云ふ、「襲も、亦た重累するなり」と。

〔語釋〕

○淮南云——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷十三「汜論篇」及びその高誘注に同文あり。

(46) 〈謹厚以爲豊〉

謹、善也。豊、大也。言衆人雖不知己、猶復重累仁徳、及興禮義、修行謹善、以自廣大也。

〔訓讀文〕

謹は、善なり。豊は、大なり。言ふところは、衆人已を知らずと雖も、猶ほ復た仁徳を重累し、禮義を及興し、謹善を修行し、以て自ら廣大にするなり、と。

〔語釋〕

○修行——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷三「天問章句第三」の「禮を天下に受け、又之に代はるに至らしむるか（受禮天下、又使至代之）」に対する王逸注に「言ふところは、王者既に已に禮義を修行し、天命を受けて天下を有つ。又何爲すれぞ異姓をして之を代へしむるに至らんや、と（言王者既已修行禮義、受天命而有天下矣。又何爲至使異姓代之乎）」とあり、ここでは修養することを指す。

〔47〕（重華不可選兮）

選・逢、一作「選」。『史記』作「悟」。

〔補曰〕選・選、當作選。音忤、與「迕」同。『列子』、「選物而不懼」是也。『釋文』、「選、五各切。心不欲見而見曰選。」於義頗迕。

〔訓讀文〕

選・逢、一に「選」に作る。『史記』は「悟」に作る。

〔補に曰はく〕選・選、當に選に作るべし。音は忤、「迕」と同じ。『列子』に、「物に選おそひて懼れず」とは是れなり。『釋文』に、「選は、五各の切。心見るを欲せずして見るを選と曰ふ」と。義に於いて頗る迕ふ、と。

〔語釋〕

○列子——『列子集釋』（新編諸子集成）卷二「黃帝篇」に同文あり。○釋文——『楚辭釋文』のこと。前掲。

〔48〕（孰知余之從容）

從容、舉動也。言聖辟重華、不可逢遇、誰得知我舉動欲行忠信也。

〔訓讀文〕

從容は、舉動なり。言ふところは、聖辟^{せいへき}重華は、逢遇すべからず、誰か我が舉動忠信を行はんと欲するを得んや、と。

〔語釋〕

○從容、舉動也——「舉動」は立ち居振る舞いの意。『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷十四「哀時命章句第十四」に「俗嫉妬して賢を蔽ひ、孰れか余の從容を知らん（俗嫉妬而蔽賢兮、孰知余之從容）」とある。○聖辟重華——「辟」は『毛詩正義』（十三經注疏）卷十六 大雅 文王之什「棫櫟」に「濟濟たる辟王（濟濟辟王）」とあり、その鄭箋に「辟は、君なり（辟、君也）」とある。「重華」は舜の美称。

〔49〕（古固有不並兮）

並、俱。

〔補曰〕此言聖賢有不並時而生者。故重華不可遷。湯・禹不可慕也。

〔訓讀文〕

並は、俱なり。

〔補に曰はく〕此れ言ふところは、聖賢は時に並はずして生ずる者有り。故に重華選ふべからず。湯・禹は慕ふべからざるなり、と。

〔語釋〕

○聖賢有不並時而生者——聖人と有能な賢人は時期を同じくすることはないこと。

(50) 〈豈知其何故〉

言往古之世、忠佞之臣不可俱並事君、必相剋害、故曰「豈知其何故。」一本此與下句末皆有「也」字。『史記』云、「豈知其故也。」

〔訓讀文〕

言ふところは、往古の世、忠佞の臣 俱に並びて君に事ふべからず、必ず相剋害す、故に曰はく、「豈に其の何の故なるかを知らんや」と。一本此と下句の末と皆な「也」の字有り。『史記』に云ふ、「豈に其の故を知らんや」と。

〔語釋〕

○剋害——ここでは、忠臣と佞臣は並び立って君に仕えることはなく、必ず互いに憎み合うということ。

(51) (52) 〈湯禹久遠兮、邈而不可慕〉

慕、思也。言殷湯・夏禹聖德之君明於知人。然去久遠、不可思慕而得事之也。『史記』云、「邈不可慕也。」

〔訓讀文〕

慕は、思ぶなり。言ふところは、殷の湯・夏の禹は聖徳の君にして人を知るに明らかなり。然れども去ること久遠にして、思慕して之に事ふるを得べからざるなり、と。『史記』に云ふ、「邈として慕ふべからざるなり」と。

〔語釋〕

○邈——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷一「離騷章句第二」に「志を抑へて節を弭むるも、神高く馳せて之れ邈邈たり（抑志而弭節兮、神高馳之邈邈）」とあり、その王逸注に「邈邈は、遠き貌なり（邈邈、遠貌）」とある。○知人——人の才知や品行を弁別すること。ここでは、湯や禹が凡人と異なり、人の才徳を察知することに長じていることを言う。

〔本文〕

- (53) 懲連改忿兮、
連みうらを懲ととめ忿いりを改め、
- (54) 抑心而自強、
心を抑へて自ら強め、
- (55) 離懲而不遷兮、
懲うれひに離かりて遷かさず、
- (56) 願志之有像。
志しのの像り有るを願ふ。
- (57) 進路北次兮。
路を進み北やどに次る。
- (58) 日昧昧其將暮。
日ま昧まい昧として其れ將に暮れなんとす。
- (59) 舒憂娛哀兮、
憂なひを舒たのべ哀たのしみを娛たのしましめ、
- (60) 限之以大故。
之かを限るに大故たいこを以てせん。

〔通釋〕

恨むことを止め、怒る気持ちを変え、心をおさえてみずから勉め、憂いにあつても節操を移さず、おのれの志が後世

の法則とならんことを願う。懐かしい郢都に帰ろうかと路を進んで、北方に宿った。その時、あたりはすでに薄暗く、日はいまにも暮れようとしている。(自分の命運もはや尽きはてた。)しばしがほどは、憂いを和らげ、悲しい心の中に僅かな楽しみを見出しはみるが、やがて死によって、救済の当てのない懊悩に決着をつけることとしよう。

〔洪興祖補注〕

(53) 〈懲違改忿兮〉

懲、止也。忿、恨也。『史記』「連」作「違」。

〔訓讀文〕

懲は、止むるなり。忿は、恨むなり。『史記』は「連」を「違」に作る。

〔語釋〕

○懲、止也——『毛詩正義』(十三經注疏)卷十二小雅節南山之什「節南山」に「民言嘉よき無なきも、慍かつて懲なげめ嗟なげく莫なし(民言無嘉、慍莫懲嗟)」とあり、鄭箋に「懲、止也」とある。

(54) 〈抑心而自彊〉

抑、按也。言己知禹・湯不可得、則止己留連之心、改其忿恨、按慰己心、以自強勉也。強、『史記』作「彊」。
〔補曰〕強、巨兩切。

〔訓讀文〕

抑は、按なり。言ふころは、己禹・湯の得べからざるをれば、則ち己の留連りうれんの心を止め、其の忿恨ふんこんを改め、己の心を按慰あんゐし、以て自ら強勉するなり、と。強、『史記』は「彊」に作る。

〔補に曰はく〕強は、巨兩の切、と。

〔語釋〕

○禹・湯不可得——ここでは、自分を理解してくれる聖天子に巡り合えなかつたことを指す。○止己留連之心——「留連之心」は、ぐずぐずして去るに忍びない心の内。その心に諦めをつけること。

〔55〕〔離慙而不遷兮〕

慙、病也。遷、徙也。慙、『史記』作「潛」、一作「閔」。

〔訓讀文〕

慙は、病うれひなり。遷は、徙うつるなり。慙は、『史記』は「潛」に作り、一に「閔」に作る。

〔語釋〕

○遷、徙也——『楚辭章句』(楚辭要籍叢刊) 卷一「離騷經章句第二」に「忽きくち緯くわく續して其れ遷り難し(忽緯續其難遷)」とあるが、その王逸注にも「遷、徙也」とある。

〔56〕〔願志之有像〕

像、法也。言己自勉修善、身雖遭病、心終不徙、願志行流於後世、爲人法也。『史記』「像」作「象」。

〔訓讀文〕

像は、法なり。言ふところは、己自ら善を勉修し、身病ひに遭ふと雖も、心終に徒らず、志行後世に流しき、人の法と爲るを願ふなり、と。『史記』は「像」を「象」に作る。

〔語釋〕

○志行流於後世——自分の志したことが後世に広がること。ここでの「流」は流布の意。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に同文あり。

〔57〕（進路北次兮）

路、道也。次、舍也。

〔訓讀文〕

路は、道なり。次は、やど舍るなり。

〔語釋〕

○次、舍也——『楚辭章句』（楚辭要籍叢刊）卷一「離騷經章句第一」に「夕べに歸りて窮石に次り（夕歸次於窮石兮）」とあるが、その王逸注にも「次、舍也」とある。

〔58〕（日昧其將暮）

昧、冥也。言己思念楚國、願得君命、進道北行、以次舍止、冀遂還歸。日又將暮、不可去也。

〔訓讀文〕

昧は、冥きなり。言ふところは、己楚國を思念して、君命を得んことを願ひ、道を進んで北行し、以て次舎して止まり、遂に還歸せんことを冀ふ。日又將に暮れんとするも、去るべからざるなり、と。

〔語釋〕

○昧、冥也——『尚書正義』（十三經注疏）卷二「堯典」に「宅西を昧谷と曰ふ（宅西曰昧谷）」とあり、偽孔伝に「昧は冥きなり（昧、冥也）」とある。

〔59〕（舒憂娛哀兮）

娛、樂。『史記』云、「含憂虞哀。」

〔訓讀文〕

娛は、樂しむなり。『史記』に云ふ、「含憂虞哀」と。

〔語釋〕

○史記云——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「含憂虞哀兮」とある。

〔60〕（限之以大故）

限、度也。大故、死亡也。言己自知不遇、聊作詞賦、以舒展憂思、樂己悲愁、自度以死亡而已。終無它志也。
〔補曰〕『孟子』云、「今也不幸、至於大故。」

〔訓讀文〕

限は、度なり。大故は、死亡なり。言ふところは、己自ら不遇を知り、聊く詞賦を作り、以て憂思を舒展し、己の悲愁を樂しみ、自ら度りて以て死亡するのみ。終に它志無きなり、と。

〔補に曰はく〕『孟子』に云ふ、「今や不幸にして、大故に至れり」と。

〔語釋〕

○舒展憂思——ここでは、憂いの心を詞賦にあまねく託すこと。○樂己悲愁——悲愁を和らげる意か。○自度以死亡——懊惱に対し自身で決着をつけるために、死を選択すること。○孟子云——『孟子注疏』(十三經注疏)卷五上「滕文公章句上」に同文あり。

〔本文〕

亂曰

亂に曰はく

(61) 浩浩沅湘、

浩浩たる沅湘、

(62) 分流汨兮。

分流 汨たり。

(63) 脩路幽蔽、

脩路 幽蔽して、

(64) 道遠忽兮。

道 遠忽たり。

(65) 懷質抱情、

質を懷き情を抱き、

(66) 獨無匹兮。

獨り匹無し。

(67) 伯樂既沒、

伯樂既に沒し、

(68) 驥焉程兮。

驥焉 焉いづくにか程はからん。

- (69) 萬民之生、
萬民の生、
- (70) 各有所錯兮、
各々錯おく所有り。
- (71) 定心廣志、
心を定め志を廣くして、
- (72) 余何畏懼兮、
余何ぞ畏い懼くせん。
- (73) 曾傷爰哀、
曾かねて傷み爰こに哀しみ、
- (74) 永歎喟兮、
永く歎たん喟きす。
- (75) 世溷濁莫吾知、
世溷こん濁たくして吾を知る莫く、
- (76) 人心不可謂兮、
人心は謂ふべからず。
- (77) 知死不可讓、
死の讓るべからざるを知り、
- (78) 願勿愛兮、
願はくは愛おしむ勿なけん。
- (79) 明告君子、
明らかに君子に告ぐ、
- (80) 吾將以爲類兮、
吾將に以て類たらんとす。
- (81) 懷沙
懷沙

〔通釋〕

結びのことばにいう、「ひろびろとした元・湘の流れが、わかれて速かに流れている。長い道は奥深く蔽われ、その道は遠く消え去っている。美質をいだし真情をいだしながら、ただひとりそれを証明してもらえずにいる。馬の名鑑定人伯樂が死んでしまった今となつては、千里の名馬もどこでその才能を計ってもらえよう。人の運命にはそれぞれ定めがある。心を静かにし、志を広めて、私はどうして（自分に与えられた運命を）おそれたりしよう。繰返し痛み悲しみ、いつまでも歎息する。世の中は乱れ濁つて私を知ってくれる者はなく、また、人々の心が自分と全く異なっているので、説明して理解してもらふこともできない。死のさげがたいことを知つたのだから、今さら命を惜しんだりはしたくない。明らかに君子に告げ

る。私は私のことばを法としようと思う。

〔洪興祖補注〕

〔61〕〈浩浩沅湘〉

『史記』、此句末至「明告君子」、竝有「兮」字。

〔訓讀文〕

『史記』に、此の句末より「明告君子」に至るまで、竝びに「兮」の字有り。

〔語釋〕

○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」では「浩浩沅湘」句から「明告君子」句にかけて「兮」字が句末に置かれている。

〔62〕〈分流汨兮〉

浩浩、廣大貌也。汨、流也。言浩浩廣大乎沅・湘之水、分汨而流、將歸乎海。傷已放棄、獨無所歸也。分、一作「汾」。

〔補曰〕汨、音骨者、水聲也。音鶻者、涌波也。『莊子』曰、「與汨俱出。」郭象云、「洄伏而涌出者、汨也。」

〔訓讀文〕

浩浩は、廣大の貌なり。汨は、流るるなり。言ふところは、浩浩廣大乎たる沅・湘の水、分汨ぶんごして流れ、將に海に歸せんとす。已放棄せられ、獨り歸する所無きのみを傷むなり、と。分、一に「汾」に作る。

〔補に曰はく〕汨、音は骨ならば、水聲なり。音は鶻ならば、涌波なり。『莊子』に曰はく、「汨と俱に出づ」と。郭象云ふ、「洄伏して涌出する者は、汨なり」と。

〔語釋〕

○分汨而流——獨立して流れ行くさま。○莊子曰……郭象云——『莊子集釋』卷七上「達生第十九」に「齊と偕に入り、汨と偕に出で、水の道に従ひて私を爲さず。（與齊偕入、與汨偕出、従水之道而不爲私焉。）とある。『莊子』は「俱」を「偕」に作る。郭象注については同書に「回伏して涌出する者は、汨なり（回伏而涌出者、汨也）」とある。

(63) (64) 〈脩路幽蔽、道遠忽兮〉

脩、長也。言己雖在湖澤之中、幽深蔽闇、道路甚遠、且久長也。『史記』「蔽」作「拂」。自「道遠忽兮」以下、有「曾唵恒悲兮、永嘆慨兮、世既莫吾知兮、人心不可謂兮」四句。

〔訓讀文〕

脩は、長なり。言ふところは、己湖澤の中に在りと雖も、幽深蔽闇にして、道路甚だ遠く、且つ久長なり、と。『史記』「蔽」を「拂」に作る。「道遠忽兮」より以下、「曾唵恒悲兮、永嘆慨兮、世既莫吾知兮、人心不可謂兮」四句有り。

〔語釋〕

○幽深蔽闇、道路甚遠——ここでは、自己と君主との距離が果てしなく長いこと。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」は「永嘆」を「永歎」に作る。

(65) 〈懷質抱情〉

『史記』云、「懷情抱質。」

〔訓讀文〕

『史記』に云ふ、「懷情抱質」と。

〔語釋〕

○史記云——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「懷情抱質兮」とある。

〔66〕〈獨無匹兮〉

匹、雙也。言己懷敦篤之質、抱忠信之情、不與衆同。故孤莞獨行、無有雙匹也。匹、俗作「疋」。

〔訓讀文〕

匹は、雙なり。言ふところは、己敦篤とんくの質を懷き、忠信の情を抱き、衆と同じからず。故に孤莞こけん獨行、雙匹有る無きなり、と。匹は、俗に「疋」に作る。

〔語釋〕

○孤莞獨行、無有雙匹——志を同じくする人がおらず孤独なさま。歩みを共にしてくれる人がいないさま。

〔67〕〔68〕〈伯樂既沒、驥焉程兮〉

伯樂、善相馬也。程、量也。言驥不遇伯樂、則無所程量其才力也。以言賢臣不遇明君、則無所施其智能也。『史記』「沒」作「歿」。「焉」上有「將」字。

〔補曰〕『戰國策』云、「昔、騏驥駕鹽車、上吳坂、遷延負轅、而不能進。遭伯樂、仰而鳴之、知伯樂之知己也。」「淮南子」曰、「造父不能爲伯樂。」注云、「伯樂善相馬、事秦繆公。」又、王逸云、「孫陽、伯樂姓名。」而張晏云、「王良、字伯樂」。非也。王良善馭、事趙簡子。

〔訓讀文〕

伯樂は、善く馬を相るなり。程は、量るなり。言ふころは、騏驥も伯樂に遇はざれば、則ち其の才力を程量する所無きなり。以て賢臣も明君に遇はざれば、則ち其の智能を施す所無きを言ふなり、と。『史記』「没」を「歿」に作る。「焉」の上に「將」の字有り。

〔補に曰はく〕『戰國策』に云ふ、「昔、騏驥鹽車に駕して、吳の坂を上り、遷延して轅を負ひて、進む能はず。伯樂に遭ひ、仰いで之に鳴く、伯樂の己を知るを知ればなり」と。『淮南子』に曰はく、「造父伯樂と爲る能はず」と。注に云ふ、「伯樂善く馬を相、秦の繆公に事ふ」と。又、王逸云ふ、「孫陽は、伯樂の姓名なり」と。而るに張晏云ふ、「王良、字は伯樂」と。非なり。王良善く馭し、趙簡子に事ふ、と。

〔語釋〕

○騏驥不遇伯樂、則無所程量其才力也——暗君の下で仕えんと、生來の美質を發揮できないこと。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「伯樂既歿兮、驥將焉程兮。」とある。○戰國策云——『戰國策箋證』（中華要籍集釋叢書）卷十七「楚四」に「汗明曰はく、『君も亦た驥を聞くか。夫れ驥の齒至り、鹽車に服して大行に上り、蹄申び膝折け、尾湛み附潰れ、漉汁地に灑ぎ、白汗交々流れ、中阪に遷延し、負轅して上る能はず。伯樂之に遭ひ、車より下りて、攀きて之を哭し、紵衣を解きて以て之を褫ふ。驥是に於いて俛して噴し、仰いで鳴き、聲天に達し、金石より出づる聲の若き者は、何ぞや。彼の伯樂の己を知るを見ればなり……』」（汗明曰、『君亦聞驥乎。夫驥之齒至矣、服鹽車而上大行、蹄申膝折、尾湛附潰、漉汁灑地、白汗交流、中阪遷延、負轅不能上。伯樂遭之、下車、攀而哭之、解

紵衣以罽之。驥於是俛而噴、仰而鳴、聲達於天、若出金石聲者、何也。彼見伯樂之知己也……」とある。○淮南子曰……注云——『淮南鴻烈集解』（新編諸子集成）卷二「俶真訓」に同文あり。○王逸云——『楚辭補注』（楚辭要籍叢刊）卷十三「七諫章句第十三 怨世」に「孫陽に遇ひて代を得（遇孫陽而得代）」とあり、その王逸注に同文あり。○張晏云——『漢書』（點校本二十四史）卷六十四下「嚴朱吾丘父徐嚴終王賈傳第三十四下」に「王良、韉を執る（王良執韉）」とあるが、その張晏注に「王良、郵無恤、字伯樂」とある。それについて顔師古は以下の通り考証している。「左氏傳及び國語・孟子を參驗するに、郵無恤・郵良・劉無止・王良、總て一人なり。楚辭に云ふ、『驥躡躡於敝輩、遇孫陽而得代』と。王逸云ふ、「孫陽は、伯樂の姓名なり」と。列子に云ふ、「伯樂は、秦穆公の時人なり」と。其の年代を考ふるに相當たらず、張說良字は伯樂と云ふは、斯れ之を失せり（參驗左氏傳及國語・孟子、郵無恤・郵良・劉無止・王良、總一人也。楚辭云『驥躡躡於敝輩、遇孫陽而得代』。王逸云孫陽、伯樂姓名也。列子云伯樂、秦穆公時人。考其年代不相當、張說云良字伯樂、斯失之矣）」

(69) (70) 〈萬民之生、各有所錯兮〉
錯、安也。言萬民稟受天命生而各有所錯、安其志。或安于忠信、或安于詐僞、其性不同也。一云「民生有命。」『史記』「民作「人」。一云「民生稟命。」

〔訓讀文〕

錯は、安なり。言ふところは、萬民 天命を稟受して生まれながらにして各々錯く所有りて、其の志を安んず。或いは忠信に安んじ、或いは詐僞に安ずるは、其の性同じからざればなり、と。一に云ふ「民生有命」と。『史記』は「民」を「人」に作る。一に云ふ「民生稟命」と。

〔語釋〕

○各有所錯——人にはそれぞれ予め定められた天命がある意。○史記——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈

原賈生列傳第二十四」に同文あり。

(71) (72) 〈定心廣志、余何畏懼兮〉

言己既安於忠信、廣我志意、當復何懼乎。威不能動、法不能恐也。

〔訓讀文〕

言ふところは、己既に忠信に安んじ、我が志意を廣くして、當に復た何ぞ懼るべけんや。威も動く能はず、法も恐るる能はざるなり、と。

〔語釋〕

○廣我志意——闊達なさま。○威不能動、法不能恐——何者にも捉われることがないさま。

(73) (74) 〈會傷爰哀、永歎慨兮〉

爰、於也。喟、息也。言己所以心中重傷、於是歎息、自恨懷道不得施用也。會、一作「增」。

〔補曰〕會、音增。喟、丘愧切。

〔訓讀文〕

爰は、於なり。喟は、息なり。言ふところは、己心中重く傷み、是に於いて歎息して、自ら恨む所以は、道を懷くも施用せらるるを得ざればなり、と。會、一に「増」に作る。

〔補に曰はく〕會、音は増。喟は、丘愧の切、と。

〔語釋〕

○自恨懷道不得施用也——自分の行いは正しいと信念を抱いているものの、君から登用される機会がないのを恨みに思うこと。埋もれる人材の悲しみをいう。

(75) (76) (世溷濁莫吾知、人心不可謂兮)

謂、猶說也。言己遭遇亂世、衆人不知我賢。亦不可戶告人說。一云「念不可謂兮。」『史記』云、「世溷不吾知、心不可謂兮。」一云「世溷莫知、不可謂兮。」

〔訓讀文〕

謂は、猶ほ説くがごときなり。言ふところは、己亂世に遭遇して、衆人我の賢なるを知らず。亦た戸ごとに告げ人ごとに説くべからず、と。一に云ふ、「念不可謂兮」と。『史記』に云ふ、「世溷不吾知、心不可謂兮」と。一に云ふ、「世溷莫知、不可謂兮」と。

〔語釋〕

○世溷濁莫吾知——不幸にも乱世に遭遇し、周囲に自己の賢明さが理解されないこと。○史記云——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に同文あり。○亦不可戶告人說——『楚辭章句』（楚辭要籍叢刊）卷一「離騷經章句第二」にも「衆は戸ごとに説くべからず、孰れか云に余の中情を察せん（衆不可戶說兮、孰云察余之中情）」とある。

(77) (78) (知死不可讓、願勿愛兮)

讓、辭也。言人知命將終、可以建忠、伏節死義、願勿辭讓而自愛惜之也。

〔補曰〕 屈子以爲知死之不可讓、則捨生而取義可也。所惡有甚於死者、豈復愛七尺之軀哉。

〔訓讀文〕

讓は、辭なり。言ふところは、人は命の將に終はらんとするを知れば、以て忠を建て、節に伏し義に死すべくして、辭讓して自ら之を愛惜する勿からんことを願ふ、と。

〔補に曰はく〕 屈子以て死の讓るべからざるを知ると爲せば、則ち生を捨てて義を取るも可なり。惡む所死よりも甚しき者有れば、豈に復た七尺の軀を愛しまんや、と。

〔語釋〕

○願勿辭讓、而自愛惜之也——死に対して躊躇うことのないよう、意を決しているさま。躊躇いの気持ちが起こるのは、上文の「建忠」が果たされていないのではないか、命を全うできていないのではないかと心残りがゆえ。○捨生而取義——生命を投げ打つても、忠義に生きること。○所惡有甚於死者——王逸注でいう「可以建忠、伏節死義」を指す。自己の生命よりも大切なのは、懷王、そして楚国に対する忠誠心であること。○豈復愛七尺之軀哉——上文の、国に対する忠節の心が全うできるのならば、死を厭わないこと。

(79) (80) (明告君子、吾將以爲類兮)

告、語也。類、法也。『詩』云、「永錫爾類。」言已將執忠死節。故以此明白告諸君子、宜以我爲法度。一本「明」下有「以」字。

〔訓讀文〕

告は、語なり。類は、法なり。『詩』に云ふ、「永く爾に類を錫ふ」と。言ふところは、已將に忠を執り節に死せんとす。

故に此を以て明白に諸を君子に告げ、宜しく我を以て法度たらんとすべし、と。一本「明」の下に「以」の字有り。

〔語釋〕

○明告君子——ここでの「告」は、神に対して盟うことの意で、単に告げることではない。嘘偽りなく告白し、それを後世に残そうとすることを指す。○詩云——『毛詩正義』（十三經注疏）卷十六大雅生民之什「既醉」に同文あり。毛傳に「類、善也」とある。○宜以我爲法度——屈原が自決を前に君子に告白し、自己の潔白な行いが後世のより良い手本となると予期していること。

〔81〕〈懷沙〉

此章言已雖放逐、不以窮困易其行。小人蔽賢羣起而攻之。舉世之人無知我者。思古人而不得見、伏節死義而已。太史公曰、「乃作懷沙之賦、遂自投汨羅以死。」原所以死、見於此賦。故太史公獨載之。

〔訓讀文〕

此の章言ふところは、己放逐せらると雖も、窮困を以て其の行を易へず。小人賢を蔽ひ羣起ちて之を攻む。舉世の人我を知る者無し。古人を思へども見るを得ず、節を伏り義に死するのみ。太史公曰はく、「乃ち懷沙の賦を作りて、遂に自ら汨羅に投じて以て死せり」と。原の死する所以は、此の賦に見ゆ。故に太史公獨り之を載するのみ、と。

〔語釋〕

○小人蔽賢羣起而攻之——小人たちが賢人の行く手を塞いで群れ立ち、袋叩きにすること。○太史公曰——『史記』（點校本二十四史修訂本）卷八十四「屈原賈生列傳第二十四」に「乃ち懷沙の賦を作る。其の辭に曰はく、陶陶たる孟夏、草木莽莽たり……明らかに以て君子に告ぐ、吾將に以て類たらんとす。是に於いて石を懷き遂に自ら汨羅に投じて以て死せり（乃

作懷沙之賦。其辭曰、陶陶孟夏兮、草木莽莽……明以告君子兮、吾將以爲類兮。於是懷石遂自投汨羅以死」とある。

* 『楚辭補注』譯注稿（三十七）に續く。

（本號擔當者：今瀬英一朗・名越健人・井上黎・富田綾美）